薬師寺修二会（花会式）に荘厳される花づくり

村田　浩子
畿央大学健康科学部人間環境デザイン学科
（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

Making artificial flowers to be solemnly offered in Hanaeshiki Ceremony at Yakushiji Temple

Hiroko　MURATA
Department of Environmental Design, Faculty of Health Science, Kio University
（4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan）

要約　薬師寺修二会は「花会式」と呼ばれ薬師三尊を祀る金堂の内陣に壇供の餅のほか10種の造花（梅、桃、桜、藤、椿、百合、杜若、山吹、牡丹、菊）が荘厳されている。献花される10種類の花のうち梅・藤・椿・山吹・牡丹・菊の6種類を100年に亘り作り続けている橋本家を取材し、花造りの歴史、花造りに込めた思い、製作工程、製作技術等の調査を行い報告する。

Keywords：花造り、薬師寺、修二会花会式、手仕事、伝承

はじめに

畿央大学でアパレル分野を学ぶ学生は、衣服の構造や素材について学び、卒業研究で様々な繊維素材を使用した作品制作を行う。作品制作の素材としては、綿、絹、毛、麻など天然繊維を中心として取り扱ってきた。その中でも絹の取り組みでは、かつて養蚕が盛んであった奈良県山辺郡山添村で大和高原文化の会の方々と、2003年より蚕の飼育を行っている。飼育場所として山添村の廃校を活用し、養蚕農家で使われた昔の道具を使い、卵から蚕の飼育を続けて繭を作り、作品の素材とした。繭から糸を引き作品を制作している私たちの所に、国産の絹糸が欲しいという要望が届き、薬師寺花会式の花造りと関わるきっかけとなった。それは花会式の名で知られる修二会薬師悔過法要に供えられる造花を作る橋本家の方からであった。花会式とは、嘉承2年（1107）堀川天皇が皇后の病気平癒を薬師悔過法要に祈願され、霊験を得て快癒した皇后が、女官たちと五色の絹を切って造花を作り、薬師如来に献花して以来、薬師寺修二会を花会式と呼ぶようになったものである。

そのようなきっかけから始まり、橋本家と村田ゼミが交流を続ける中で、花造りの魅力を知ることになった。2011年頃から学生とともに橋本家での花造りの見学や体験に伺い、2015年には花造りの歴史、花造りに込めた思い、製作工程、製作技術等の取材を行った。花会式で飾られる造花は美しく、参拝者に感動を与えるものであるが、献花の歴史や花造りについてはあまり知られていないことも分かった。それらについて多くの方に知っていただくことを目的に「咲き継ぐ花」という冊子にまとめた。

本総説では薬師寺修二会（花会式）に献花される橋本家の花造りを中心に報告を行う。

1．春を待つ行事「修正会」「修二会」の源流

1－1．正月の「餅」と「花」

稲作農耕を生活の基盤とした古代において豊穣は生存に関わる問題であり、7世紀後半、各地の寺院や神社で雨乞いや止雨、病気平癒など専ら除災を目的とした「悔過会」が行われてきた。新年から春にかけて行われた悔過会が「修正会」、「修二会」へと継承された。他方、民間の信仰・習俗に取り込まれ、正月に集落の人々がお堂やお宮に集まり共同で祭祀、祈願し、年を取る「オコナイ」という行事が近畿地方を中心に伝播した。その後、個人の意識の発展とともに、正月を家庭でも祝うようになった。

正月は、前年の農耕の無事と豊作を祖先と氏神様に感謝する祖霊祭と、新年の豊作を祖先に約束させるため予め祝っておく農耕予祝祭の二つの意味を持っている[1)]。

収穫した稲の実で祖先の魂を表す餅（鏡餅）を作り

２０２２年４月１８日　投稿　　２０２２年４月１９日　受理

神棚に供え、神と家族が一緒に食べることで新年を祝い、今年も例年のように稲の花が咲き、稲の穂がよく実るようにと花を飾ってきた。小正月には紅白の餅を小さく丸め、柳や榎、ミズキなどの枝につけた「餅花」を飾った。餅花は地域により「稲の花」、「花餅」、養蚕が盛んな地域では「繭玉」、アワやヒエの生産をしていた場所では「粟穂稗穂」などと呼ばれた。

１－２．村の正月を祝う「オコナイ」

奈良県では、オコナイが野迫川村北今西と弓手原の両地区に伝承されている。

北今西では、1月4日（現在は2日）の早朝から村人が山に入り、阿弥陀堂内を飾るシラクチカズラやシキビ、アワギなどの材料を集める。タチバナ（立花）やフクバナ（福花）と呼ばれる紙製の造花、丸太を杉の葉で包んだ台に蜜柑や芋を挿したモリモノ（盛物）、牛玉宝印を刷り込んだ護符を挟んだ竹などで堂内を飾りつける。夜には、村人がタテモチ（立餅）を祭壇に供え、20歳になった役人らが持ち寄ったカケモチ（掛餅）をアワギの棒に掛け、須弥壇の上に吊り下げられオコナイが始まる。参拝者の読経が終わると、若い衆が梁にかけられたカズラで編まれた注連縄をねじり切り、シキビを引き抜き堂内にまき散らす。堂の厨子が閉じられた後、タテモチの競り売りが始まる。

弓手原のオコナイでも、1月2日の早朝からサカキ（フクランジョの木）、ゴマギ（ハゼの木）を刈り、板に五穀を貼ったモリモノや、ゴマギを削って花やヘーボ（稗穂）を作り、堂内の飾りつけやお供えの準備を行う。3日昼のオコナイでは大般若経600巻が転読される中、田植えの時に水口に立てると虫害除けになるというゴーサン（牛玉宝印の護符）が加持され、各戸に配布される。夜のオコナイでは、11歳から18歳までの男子（ヨナコ）が堂に集まり、村人の投げる賽銭や菓子を拾い合う。種まきを表しているという。法螺貝が吹かれ、太鼓が叩かれるなか、ヨナコはアネ（若い娘たち）の背中を押し合って騒ぐ。アネオシまたはナエオシ（苗押し）といわれ、これをしないと稲が育たないとされる。「神名帳」が読み上げられるなかで、村人が花立てのサカキを引き倒しハナ（花）をむしり取る。これも豊作を予祝する仕種である。4日には、高杯に白米を敷き、上に紅白の餅を重ね、蜜柑を乗せたお供えをする。紅餅は黄金餅といわれる粟餅である（現在は小豆餅）。村人は五穀豊穣と無病息災を祈り、魔除けになるという祈祷札を玄関わきの戸袋に貼り、オコナイを終える[2)]。

１－３．修二会の意義と造花

「悔過」とは、自らの犯した罪や過ちを告白して心から悔いあらためることをいうが、仏教儀礼としての「悔過」とは、僧侶が人々に代わって仏前に懺悔し、仏の功徳をもって国家安穏・五穀豊穣・万民豊楽を成就させることである。8世紀に入り、寺院の本尊である阿弥陀、薬師、十一面、吉祥などの尊別の「悔過会」が行われた。10世紀になり、各地の「吉祥天悔過法要」を源とした正月の祈年の法会が「修正会」として行われ、2月には「修二会」が春の行事として定着、継承されてきた[3)]。

「修正会」や「修二会」での仏前の供え物、飾り物の代表的なものに餅と花（造花や花餅）、灯明、香がある。指定された寺領の村落が餅にする米と造花と灯油のほか用役も提供し、仏像や仏堂を飾った。修正会は、正月に祖先への感謝と豊作を祈り、祖先を祭るのに餅が重用された。旧暦で農耕が始まる2月にふたたび豊作を確かなものにするために祈る修二会では造花が飾られた[4)]。

永観2年（984）に編纂された仏教説話集『三宝絵詞・下』の「二月の条」に、「此の月の一日よりもしは三夜、五夜、七夜、山里の寺々の大きなる行也。つくり花をいそぎ、名香をたき、佛の御前をかざり（中略）みな仏の御教えに従ふ也。経に云はく『花の色は仏界のかざりなり。もし花なからむ時はまさに造れる花を用ゐるべし（以下略）』」とある。造花の材料についても「そもそも絹をきざめる花」と記され、10世紀後半の修二会では、堂内が生け花や絹を切った精巧な造花で荘厳されていたことを表している。

修正会や修二会、オコナイは、日本の長期にわたって継承されてきた宗教・民俗・芸能を包摂した文化を伝える重要な儀式であり、同時に、こうした春を待つ諸行事に餅と花は欠くことのできない供え物であった。

２．薬師寺修二会（花会式）

２－１．薬師寺の略史

薬師寺は都が飛鳥にあった天武9年（680）、天武天皇が皇后鵜野讃良皇女の病気平癒を祈って発願されたが、天武天皇は寺の完成を待たずして死去した。その後、文武元年（697）に病気平癒祈願の仏像（薬師如来）が造られ開眼式を行い、翌年、文武2年（698）持統天皇が寺を完成させた[5)]。この薬師寺とは、橿原市城殿町に金堂と東西両塔遺跡を残す本薬師寺である。

和銅3年（710）、都が藤原京から平城京に遷都されたことにより、薬師寺も平城右京六条二坊の現在の地

に移り建立された。東大寺建立以前において薬師寺は、大官大寺（大安寺）、元興寺、興福寺とともに四大寺の一つに数えられた。

幾度かの火災や地震、戦乱で多くの伽藍を失うが、都度、朝廷や南都の諸寺院から復興への勧進が行われ再興が図られてきた。天禄4年（973）、寺は平城京に移築後初めての大火で、金堂と東西両塔を残し伽藍のほとんどを焼失した。その後の再興が大和、備前、美濃など9の諸国に割り当てられた。

室町時代中期、応仁の乱による筒井氏と越智氏の抗争により、享禄元年（1528）西塔が放火され、金堂、講堂、中門などを失い、白鳳期の創建以来の建築は東塔のみとなった。中世の薬師寺の歴史における最大の事件である[6]。

近年、伽藍の復興を目指し昭和43年（1968）から高田好胤管長（当時）が「お写経勧進」を開始し、昭和51年（1976）には金堂が再建された。

２－２．修二会を支えた人びと

平安時代、薬師寺の修二会は畿内周辺の11カ所の荘園が納入する米で維持が図られ、その範囲は大和から近江、摂津、河内、丹波に及んでいた。しかし、室町時代後半では、荘園制の解体が進み、負担が寺の周辺村落の負担へと変化した。16世紀以降、戦国乱世の時代となり、集落が疲弊し壇供米の寄進が滞るなかでも、天下安穏を祈る場として修二会が継続された。享禄元年（1528）の大火で主要伽藍を焼失したが、翌年、焼失を免れた東院堂で修二会が営まれている。

現存する「壇供餅支配状」には、堂内を荘厳する造花を調達する寺僧「正荘厳頭役」と、村人が勤める壇供餅を調達する「夜荘厳頭役」に関わる記事や、壇供の総数、調達する村落名とともに、米俵で納めるべき数と餅で納めるべき数なども記録されている。

村人が法会の進行に関わり、堂内に入ることを許される「堂童子」として勤めている。乱声の鐘や太鼓を叩き、練行衆への給仕などの世話をした。同時に、閉ざされた聖なる空間である堂の内陣での霊水の汲み上げや、満行を迎えた練行衆の額に牛玉宝印を押すのも堂童子の仕事であり、宗教的な聖と俗との仲介者の役目も果たしていた[7]。

２－３．造花で荘厳された修二会

修二会は旧歴の2月に行われるが、現在、薬師寺では新暦の3月25日から31日にかけて行われている。薬師三尊を祀る金堂の内陣に壇供の餅のほか10種の造花（梅、桃、桜、藤、椿、百合、杜若、山吹、牡丹、菊）が12瓶に荘厳され「花会式」と呼ばれている。

修二会の法要を勤めるのは、大導師、咒師、堂司の三役と7人の大衆と呼ばれる練行衆である。本尊の前で、一・七日（一週間）一日6回（初夜・半夜・後夜・晨朝・日中・日没）練行衆の悔過の声明が堂内に響く。

祈願作法のなかに、大導師が読み上げる「神分」がある。これは、薬師寺周辺の地域に祀られている神々に来場を求め、法会の利益を分かつためのものである。近在の水郷五大字（五条・六条・七条・九条・西ノ京）の総鎮守社である八幡社、水利の神である勝間田池の龍王社に祀られている大津皇子の聖霊、雨乞い・学問の神の天満天神などを招く。最後に春日権現の来臨を乞うことで、春日大社と一体となった興福寺を頂点とする守護体制の一翼となることを示している。

神分の後、鐘を21打ち鳴らし集落村民の参集を求める。寺が住民の生活を加護していることを地域社会に知らしめた[8]。

最終日に勤修する初夜の悔過で結願し祈願が成就する。満行した練行衆の額には牛玉宝印が押され、この宝印が日本の護符の始まりと言われている。31日の夜には5匹の鬼が松明を持って暴れまわり毘沙門天に追われる「鬼追い式」の法要が行われる。近在の人々も集まり、鬼追いの松明の火の粉を受けることで、厄除け、除災与楽の修二会の功徳を体得したのである。

写真１．金堂の内陣を飾る造花（薬師寺提供）

３．献花される花の記録

修二会に献花される造花の最も古い記録は、前述したように、「三宝絵詞」下巻の「修二月の条」に、絹を切って花を作り供えると記されている[9)]。

薬師寺の花に関して、嘉承2年（1107）堀河天皇の皇后が病に伏した際､薬師寺で薬師悔過の法会を行い、本復を祈られたところ、忽ち平癒したことを喜び、その後、女官らと五色の絹で花を作り、薬師如来に献じて供養したとある[10)]。

戦国期の薬師寺の集会記録「集會評定掟法目録事」には、天正17年（1589）に大和郡山の城主であった豊臣秀長が病に伏した時に、薬師寺でも大般若経や薬師経を読経して祈祷が行われたが､回復しなかったため、翌年の天正18年（1590）11月9日から臨時の修二会が行われることになった。その時に作られた花は「松に白梅に藤」「松に紅梅」「菊」「杜若」「赤葉桜」「糸桜」「芍薬」「青葉桜」「椿」「牡丹」の10瓶である[11)]。

薬師寺には造花の作り方について、挿図を交え詳細に記録した「修二会花造仕様帳」がある。この書は天保8年（1837）法輪院の僧侶宥遍により作成されたもので、本文には花の種類や数、作り方、紙の染め方や裁ち方などが挿図付きで記され、作業後の改善点などの書き込みもみられる。また所々に造花の染料の赤、青、黄色のシミがついており、本文書を脇に置いて見ながら造花を作るといった情景がうかがえる。当時、バラの漢名である「長春」や躑躅など、現在では作られていない花も登場する[12)]。

このほか、増田家には明治38年（1905）・大正3年（1914）銘の「造花仕立要記」が残されている。童謡「故郷」や「春の小川」などの作詞家高野辰之は、昭和初期の花会式を参観し、「梅・桜・藤・山吹・百合の5種が花瓶に組み合わせて幾百本となく供へられて、色美しく本尊も脇立の日光・月光両菩薩も花の中に立たせ給う」と記述している[13)]。

４．花会式を彩る橋本家の造花

４－１．調査内容

薬師寺修二会花会式に献花される造花は、菩提山町の橋本家と寺侍の家柄であった増田家の両家により作られている。両家で花造りを体験するなかで、花造りの歴史、花造りに込めた思い、製作工程、製作技術等を聞き取りその記録を冊子にまとめた。本稿では橋本家における花造りについての調査報告を行う。

・調査期間：　2015年11月～ 2016年3月
・調査場所：　奈良市　橋本家
・調査方法：　大正時代初期から献花される10種類のうち橋本家が担う6種類の花造りの体験および花造りに関する聞き取り調査を行う

４－２．両家で作られる花の種類と本数

橋本家では6種類、996本を作る。

・梅　340本（白140本、赤200本）
・山吹　90本
・椿　320本（赤105本、白105本、ピンク55本、しもふり55本）
・牡丹 120本（赤48本、ピンク36本、しもふり36本）
・菊　120本（黄32本、赤27本、ピンク37本、しもふり24本）
・藤　6本

増田家では4種類、730本を作る。

・桜　300本
・桃　300本（白120本、赤180本）
・杜若　60本（白30本、紫30本）
・百合　60本（白10本、かばちゃ10本、赤20本、ピンク20本）

４－３．橋本家の花造りの由来

橋本家は約100年に亘り花造りを伝承され、現在は4代目の一良（かずよし）氏に受け継がれている。もともと橋本家の一良氏の曽祖父一良（いちろう）氏は正暦寺の塔頭成身院の住職であったが、明治時代半ばに住職を退任し、僧籍のまま以前あったという寺の大門の外へと越してきた。

花造りが始まったのは一良氏の息子で薬師寺の僧であった勝範氏が、大正時代初期に帰俗した際、橋本家に花造りを持ち帰ったのがきっかけとされている。その後4代目の一良氏に受け継がれている。その橋本家は、成身院住職を勤めていた頃から「白丁浸」という漢方薬を販売していたことでも有名であり、薬を求めて多くの人が橋本家を訪れた。現在は兼業農家を営みながら1年を通して献花される10種類のうち梅・藤・椿・山吹・牡丹・菊の6種類の花造りを行っている。

４－４．橋本家の花造り年間スケジュール

兼業農家を営む橋本家では、以前は田畑仕事が一段落した11月初旬から花造りを進めてきたが、高齢の一良さん、房子さんが家に居ることが多くなり、1年を通して取り組むようになった。3月中旬に薬師寺に完成した花を納めるが、間もなく翌年の花造りの材料の調達、花の土台つくりを始める。

写真２．６種の造花（左上から梅、藤、椿、左下から山吹、椿、菊）

図１　花造り（主な作業）年間スケジュール

		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
梅	ズアイ巻き						■							
	花びら用紙染色									■				
	花びらの裁断										■			
	花びらをいためる										■			
	ツボミつくり											■		
	組み立て											■	■	
	こより作り												■	
牡丹	花びらの裁断	■												
	花びら染色									■				
	花びらをしぼる									■				
	組み立て											■	■	
椿	花びらの裁断	■												
	花びら染色									■				
	花びらをいためる										■			
	組み立て											■	■	
菊	花びらの裁断	■												
	花びら染色									■				
	花びらをひねる											■		
	ツボミつくり											■		
	花の蝋引き												■	
	組み立て												■	
山吹	花びら用紙染色											■		
	花びらの裁断											■		
	花びらをいためる											■		
	ツボミつくり											■		
	組み立て												■	
藤	花びらの裁断	■												
	花びらをいためる										■			
	ツボミつくり											■		
	組み立て											■	■	
葉	葉の裁断	■												
茎	竹の準備										■			
ツボミ	タラの木の採取										■			
完成	咲く・献花													■
農作業	畑つくり		■			■								
	夏野菜種まき畑作業			■	■	■	■							
	田植え				■									
	冬野菜種まき畑作業						■	■	■	■	■			
	稲刈り								■					

男性は茎や枝に使用する竹を切り出し、細工を施すなどの力仕事を、女性は主に花びらや葉に使う和紙の裁断、染色加工を担う。その花びらには皺を、葉には葉脈などの筋をつける。花びらの貼りあわせ、花に蝋を塗る蝋引き、組み立てなど、多くの工程を経て花が完成する。

花は昔ながらの方法で心を込めて作られ、華やかで美しくより本物らしいものになる。また先祖から代々受け継がれてきた道具を大切に使いながらも、効率的な花づくりができるよう徐々に改良・工夫を重ねている。以前よりも作業自体は随分楽になったそうだが、材料の調達から花の組み立てに至るまで、一つ一つの工程が手作業で行われており、華やかな花会式からは想像することのできない地道な努力が積み重ねられてきたのである。

４－５．花造りに使われる材料、道具、用語

製作工程の中で脈々と受け継がれてきた花のパーツとなる素材や材料、花造りの道具、使用されている用語などについて聞き取った内容を示す。

（１）花の各部の素材

・茎や枝＝真竹を使う。竹は手作業で紙や糸が巻きやすいように断面が丸四角形になるよう削る。椿や菊に使う花の台には丁子、牡丹には桐の枝を用いる。
・つぼみ＝タラの木を使う。枝の樹皮を削り、大きさごとに分けて梅・菊・山吹のつぼみ、藤のつぼみに使用する。芯が柔らかいので整形が容易であり、特に1年目の枝には「ス」が入っておらず、また一番上側の枝は、芯が純白なので染色加工に適している。
・花びら＝それぞれの花によって厚み、硬さなど加工に適切な紙を選ぶ。赤い梅の花びらは美濃和紙、白い梅の花びらと藤の花は奉書紙、山吹の薄い花びらには因州和紙と仙花紙、椿と牡丹には杉原和紙を使う。
・おしべ＝「におい」と呼ばれる梅のおしべには鹿の尻尾の毛を使い、おしべの先に黄色いキハダの粉末をつける。牡丹のおしべにもキハダの粉を使う。（キハダ：ミカン科キハダ属で落葉高木であり、樹皮の内側が鮮黄色で生薬、染料などに利用される）

（２）造形の材料

・染料＝山吹の花びらは、自宅庭のクチナシを収穫し鋏で半分に切り、煮出して黄色に染め上げる。赤い菊、赤い牡丹の花びらは食紅で染め、椿の斑入りはブラシで染料を散らして作る。梅のガクは墨汁で染める。
・糊＝使用する紙によって2種類の糊を使い分ける。一つは白い花用の糊として炊いたご飯を練ってつくる続飯（そっくい）を使う。いま一つは色付きの花に使う糊で、もち米とうるち米1:4を水に一晩浸けミキサーで攪拌したもの。
・蝋＝菊の花びらはカールを保つよう、炭火で溶かした蝋を薄く塗る。以前は白梅と白い椿以外は全て蝋引きをしていた。
・絹糸＝梅のズアイを巻き上げるのに使う。

（３）造形に使用する道具

・打ち抜き棒＝花びらを裁断する棒。
・ひねり棒・いため棒＝花びらや葉に皺をよせたり筋（葉脈）をつけたりする際に使用する棒。古い茅葺屋根からとれる煤竹が使われる。棒は囲炉裏でいぶされたことで黒く、硬く、丈夫なものになっている。
・ずんどう＝藁でできた米俵のようなもので、完成した花を挿しておく。

（４）花造りの工程で使われる特別な用語

・「しぼる」「いためる」「たゆます」＝花びらや葉に布を当て挟んで皺をよせること。
・「蝋をはしらせる」＝菊の花びらに蝋を塗ること。
・「葺く」＝花びらを土台に貼ること。
・「ちょうちん」＝牡丹の土台に貼ったおしべめしべの部分。
・「ちょうちんを巻く」＝火箸でおしべとめしべをカールさせること。
・「茎をいためる」＝茎に使われた竹を曲げること。
・「咲く」＝造花が完成すること。

写真３．使用される用語の説明（左上から２枚しぼる、いためる、蝋をはしらせる、
左下から葺く、2枚ちょうちん、咲く）

４－６．　花造りの工程―梅の花―

①　紙の裁断

写真４．裁断工程。赤い梅には美濃和紙、白い梅には奉書紙が使われる。花びらはひとひ
らずつ金属製の打ち抜き棒を槌で打って抜く

②　花びらの丸みつけ

写真５．梅の花びらは5枚を重ね手のひらに乗せ、いため棒で押しつけ丸みをつける

③　おしべつくり

写真６．鹿のお尻の毛をたばねたものの先にキハダの粉をつけおしべにする。「におい」
と呼ばれ、花びらの上に乗せ「そっくい」で貼る

④　つぼみつくり

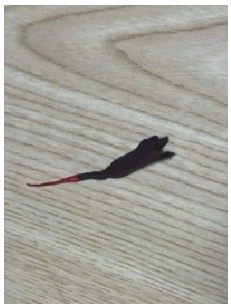


写真７．梅の蕾には表皮をむいたタラの枝の芯を使う。芯は細工が容易で､染色しやすい。
ガクは紙を裁断し、上半分を墨汁で染め、下半分をひねって形を整える

⑤　ズアイ巻き

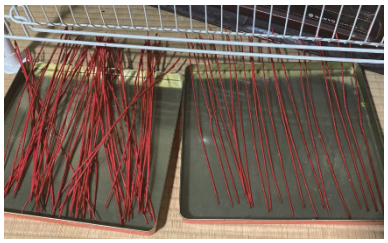
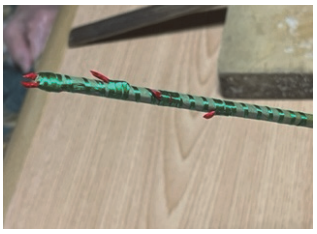
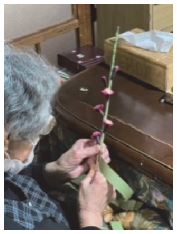



写真８．ズアイはスアエ、ズア江、ズワイなど様々な呼び方があるが、梅の若枝のことをいう。ズアイ部分は、赤い和紙をこよりにしたものだが、昔は稲を使っていた。こよりにつぼみ、花を絹糸で一緒に巻き上げることをズアイ巻きという（左から絹糸、こより、完成したズアイ）

⑥　組み立て



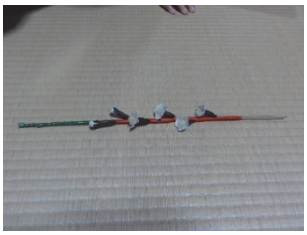


写真９．梅の花4つ、つぼみ２つを竹に和紙で挟み込みながら巻き立てる

⑦　咲かせる

写真10．梅が完成し「ずんどう」に挿す

写真11．座敷に並んだ菊、椿、牡丹、藤、梅、山吹

⑧　花送り

写真12．花を「ずんどう」に挿して運ぶ。かつては天秤棒を担ぎ何度も往復して花を運んだ（写真家　野本暉房氏提供）

おわりに

これまで多くの人びとが薬師寺とともに花会式の花を作り、壇供の餅を丸め、五穀豊穣や地味増長を祈願し、芸能の側面を持つ鬼追いの儀式などで春を迎えてきた。5月には、奈良盆地の農村地域で、「レンゾ」と呼ばれる農休みの日の風習がある。農耕が始まる前の一日、村人たちがご馳走を重箱に詰め山に登り、田の神と食事を共に楽しむ「田の神祭の日」である。山の躑躅を持ち帰り、苗代の水口に立て稲の生育を祈った。薬師寺周辺の人びとにとって花会式はレンゾの日であったのだろうと考える。

今回、100年に亘り薬師寺の修二会花会式のための花造りを担う橋本家を訪れ、1年半の取材を行った。橋本家では、代々受け継がれてきた手作りの道具、私たちの生活になじみ深い材料を使い、巧みな手仕事により6種類の花造りを行っていた。

兼業農家である橋本家の花造りは、田畑の仕事の合間に組み込まれた生活の一部であった。作業の傍ら一良氏から「お花造りをさせていただいてありがたい」という言葉を度々耳にした。また座敷いっぱいに咲かせた花を送り出すことは「手塩にかけて育てた娘を嫁にやる気持ち」と同じと言う。100年前から伝承されてきたこの花造りには、作り手が多くの人の幸せを真に願った献花であると感じた。

花会式に飾られる造花の歴史や背景に感動を覚え、この美しい伝統がいつまでも継承されることを心から願っている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、調査にご協力いただいた橋本家の皆様方、法相宗大本山薬師寺宝物管理研究所研究員山本潤様、薬師寺広報室新谷紀子様、ご助言をいただいた砂山七郎様、共に取材を行った卒業生の山片実咲様に心より感謝申し上げます。

文献・注釈

１）五来重：五来重著作集第8巻、法蔵館、京都　p 10 ～ 12（2009）

２）奈良県教育委員会事務局文化財保存課：野迫川村のオコナイ解説書―北今西・弓手原－2018、奈良の文化遺産を活かした総合地域活性化事業実行委員会、奈良　p30 ～ 35（2018）。両地区のオコナイは奈良県無形民俗文化財に指定されている。

３）山岸常人：悔過から修正・修二会へ―平安時代前期悔過会への変容―．南都佛教52．45 ～ 47.1984

４）五来重：五来重著作集第8巻、法蔵館、京都　p 443 ～ 445（2009）

５）山田法胤：薬師寺の歴史と薬師悔過．薬師寺147：12 ～ 15．2006
薬師寺の歴史については多くの論考があるが本稿では薬師寺が発行する雑誌に従った。

６）太田博太郎、岡田英男、薗部澄：第Ⅱ章薬師寺の歴史．薬師寺発掘調査報告．13．1987

７）西瀬英紀：薬師寺修二会の存続基盤．芸能研究76．41 ～ 42．1982

８）同上書　34 ～ 38．1982

９）佐竹昭広ら編：三宝絵注好選 新日本古典文学大系31、岩波書店、東京 p 154（1997）
「三宝絵詞」の本来の形態は絵と詞で冷泉天皇の第2皇女尊子内親王のために仏・法・僧の三宝について平易に説明したもので「三宝絵」と呼ばれた。このうち文章を上中下の3巻に収め、下巻に仏教行事の解説と説話を記している。現在、絵は存在しない。

10）山本潤：修二会花会式．薬師寺203　37 ～ 47。享保元年（1716）に記された絵巻「大和国添下郡右京薬師寺縁起」による。

11）同上書

12）宍戸香美：薬師寺宝物管理研究所だより宝物拾遺（七）薬師寺171　62 ～ 63

13）高野辰之：芸淵耽溺、東京堂、東京、p170（1936）